

# 復讐とカルマの物語 Thomas Pynchon の *Vineland*

木原 善彦

Thomas Pynchon の *Vineland*<sup>1)</sup> には、東洋思想へのアリュージョンが数多く見られるが、Elaine B. Safer を始めとして、批評家の多くは、それらを、浅薄なパロディだと考えているようである<sup>2)</sup>。確かに、近年のアメリカにおける東洋思想の流行を皮肉っているという側面があるのは否定できないが、とくに、「カルマ」(karma) という概念は、より複雑な形で作品に関わっており、十分に考察に値すると思われる。

*Vineland* は、何人かの批評家が指摘しているように、「体制側」と「反体制側」との闘いの物語であり<sup>3)</sup>、その際に、カルマは反体制側の人々の味方をする影の影響力を持っているようである。

そこで、本稿では、*Vineland* の中に現われる「カルマ」とはどのような概念なのかを明らかにしつつ、作品全体の構造、文体との関わりを見てみたい。

## I

*OED* の定義によると、“karma” とは、“the sum of a person’s actions in one of his successive states of existence, regarded as determining his fate in the next” である<sup>4)</sup>。作品中で (218) 言及される *The Tibetan Book of the Dead* には、“there is one harmonious karmic law governing with unwavering and impartial justice the visible as well as the invisible operations of nature” という一節がある<sup>5)</sup>。

後者の思想とよく似た信念を持っているのが、Frenesi の祖父 Jess Traverse とその一族である。「カルマ」的世界観に触れる言及で、もっとも本格的かつ真剣なものは、Jess が毎年恒例になっている朗読を行なう場面に見られる。

“‘Secret retributions are always restoring the level, when disturbed, of the divine justice. It is impossible to tilt the beam. All the tyrants and proprietors and monopolists of the world in vain set their shoulders to heave the bar. Settles forever more the ponderous equator to its line, and man and mote, and star and sun, must range to it, or be pulverized by the recoil.’” (369)

人の財産、自由、生命を奪ったり、脅かしたりすることは、釣り合っている天秤を傾ける行為であり、そんなことをしようとする、反動で天罰が当たるのだと、Jess は説いている。この後、Jess は話を続けて、Crocker “Bud” Scantling も、この “divine justice” を乱したために “secret retribution” の作用を受けて、交通事故死したのだと言う。

林業協会の会長であった Scantling は、かつて、林業労働者を一つの組合のもとに団結させようとしていた Jess を脅すため、Jess の上に木が倒れるように工作をした人物で、その際、Jess は命は助かったが、足の自由を失った (75)。その仇は誰が討つというわけでもなく、偶然の事故によって果たされるのである。しかし、興味深いのは、Scantling が車で衝突する相手が “an oncoming chip truck” (369) だという点である。単に Jess の恨みが晴らされただけでなく、人を傷つけるために利用された木が、“chip” (木材を細かく削ったもの) に姿を変えて、その復讐に手を貸したように思われるからである。

連邦検事であり、また、作品の悪玉役である Brock Vond が殺されるのは、上に引用した朗読の直後であるため (379-380)、Brock の死も “divine justice” ないしは “karmic justice” によるものであるという印象が強めら

れている。

そして、小説の終わりの部分で、このような「カルマ」的な正義の裁き、復讐が、非常に印象的な形で、しかも、読者にある種のカタルシスを与える形で現われている例を見ることが出来る。Zoyd と Prairie の飼っている犬 Desmond が約一か月にわたる放浪生活から戻ってくるとき、その顔はたくさんのアオカケス (blue jay) の羽毛にまみれている (385)。なぜ、そうになっているのかは書かれていないが、Desmond は普段 “the blue jays who came screaming out of the redwoods and carried off the food in [his dish] piece by piece” (4) にいじめられ続けていたことと、ここ一月程は誰も餌をやるものがいなかったことを思い起こせば、おそらく、カケスと闘って、そのうちの何羽かを食べてしまったのだろうと考えられる。この挿話は、ドッグフードをとられた恨みで復讐に鳥を食べたという滑稽な側面があるのにも関わらず、作品全体を取り囲む枠組みとしての「カルマ」的復讐の存在を示しており、作品に一つのまとまりを与えている。

そして、復讐ということに注目するなら、*Vineland* の中に登場する、“Thanatoid” と呼ばれる奇妙な登場人物達も非常に興味深い。彼らは、いわば、ゾンビであり、この世に恨みを残したまま死んでしまったために、あの世に行くことが出来ず、ただ、復讐を夢見て暮らしている。

They [Thanatoids] were victims, he [Takeshi] explained, of karmic imbalances — unanswered blows, unredeemed suffering, escapes by the guilty — anything that frustrated their daily expeditions on into the interior of Death, with Shade Creek a psychic jumping-off town — behind it, unrolling, regions unmapped, dwelt in by these transient souls in constant turnover, not living but persisting, on the skimpiest of hopes. (173)

“karmic imbalances” とは、例に挙げられているとおり、「やられっぱなしで、仕返しが済んでいなかったり、苦しい思いをするばかりで救われなかったり、悪い奴らがどこかへ逃げてしまったり」することである。“Thanatoid”

達は、「死」の一步手前にある Shade Creek の町で、ただひたすら、わずかな希望、恨みを晴らし復讐するという希望を抱いて暮らしている。その中には、ベトナム戦争で死んだ若者、学生運動のリーダーをしていたために暗殺された人物などが含まれている。

従って、ここにある寓意は明らかである。“Thanatoid” 達は「60年代」の亡霊であり、抑圧された反体制側の声を代表するゾンビなのである。彼らが、自然の姿をとどめたままの Vineland 郡の山の奥に暮らしていることは、別の意味で、象徴的なものとなる。コロンブスが「発見」し、白人が侵略したアメリカではなく、西暦1000年頃に Leif Ericson がたどりつき、侵略することのなかった Vinland としてのアメリカと、反体制勢力とがそこで一つになっているからである。すなわち、「体制側、抑圧、侵略、アメリカ国家」という系列と、「反体制側、自由、共生、Vinland」という系列との対立がより鮮明に浮かび上がってくるのである。

## II

Takeshi Fumimota は “karmic adjustment” (カルマの精算) と呼ばれる仕事を開業しているが、この仕事は *The Tibetan Book of the Dead* に記されている死後の裁きに似ているようである。その死後の裁きにおいては、ヒンドゥー教における死者の神、「閻魔」(Yama) が、秤を使って、死者の生前の良い行ないと悪い行ない、すなわち、カルマを計り、それにしたがって、罰や褒美を割り当てることになっている。<sup>6)</sup> 同様に、Takeshi は、まるで現代の閻魔のように、人の集めている “karmic chits” をコンピューターを使って計算することが出来る (365)。

“karmic adjustment” という仕事の具体的な内容は、書かれていないが、カルマのアンバランス (“unanswered blows, unredeemed suffering, escapes by the guilty” [173]) を評価、査定することと、その払戻しを行なうこと、換言すれば、復讐をすることが、主な業務であると考えられる。

この点に関連して、更に、推理を進めると、Vato と Blood による Brock の暗殺も、あるいは Takeshi とこの二人組の間で何らかの取引があった結果だという可能性もでてくる。なぜなら、Vato と Blood は、Takeshi に何度かカウンセリングを受けていて、その料金をまだ支払っていないようなので (177-79)、この暗殺に手を貸すことで帳消しにしてもらおうということがあり得るからである。少なくとも、Vato と Blood が直接 Brock に恨みを抱くような事実があったことは書かれていない。

その点はさておき、Takeshi は、自分の開業している “karmic adjustment” は、昔のそれとは種類が違うのだと述べている。

In traditional karmic adjustment, he [Takeshi] went on, sometimes it had taken centuries. Death was the driving pulse — everything had moved as slowly as the cycles of birth and death, but this proved to be too slow for enough people to begin, eventually, to provide a market niche. There arose a system of deferment, of borrowing against karmic futures. Death, in Modern Karmic Adjustment, got removed from the process. (174-75)

ここで言う “traditional karmic adjustment” は、仏教、ヒンドゥー教のパロディーであり、その考え方に従えば、カルマの精算をするためには、一度死んで、生まれ変わらなければならないのであり、生まれ変わって初めて、前世のカルマがむくわれるとされている。ところが、Takeshi の “Modern Karmic Adjustment” のやり方だと、生まれ変わる必要はなく、また、まるでカルマがお金であるかのように、延べ払いに出来たり、前借り出来たりするらしい。実際、Takeshi は、世界の通貨体系を、“giri chits” すなわち “karmic IOU’s” に基づいたものにしたいとさえ考えている (100)。この Takeshi の考え方は、カルマ概念を、もっとも滑稽な形で転用したものと言えるだろうが、それ以上に注目すべきは、“giri” や “IOU” などの語から分かる通り、カルマという言葉で含意されるのは、復讐ばかりではなく、恩返しということも、同様に、重要な要素だということである。

更に、カルマをお金に例える比喻は、復讐や恩返しという出来事の連鎖が、単純に当事者同志の間で行なわれるのではなく、金銭の流通のように、複雑に、入り組んだ関係を経るものであることを暗示する。

例えば、飛行機の中で Zoyd が Takeshi の命を助けたとき、Takeshi は彼に名刺のような“giri chit”を手渡し(65-67)、十数年間それをなくさず持っていた Zoyd は、Brock から逃げるために Prairie と別れる際に、彼女にそのカードを持たせ(56)、彼女は、ボーイフレンドの Isaiah Two Four がたまたまバンドとして呼ばれた Ralph Wayvone, Sr. の屋敷で、現在 Takeshi のパートナーをしている DL Chastain に会うこととなり(100)、Prairie は、Takeshi と DL の助けを借りながら母親捜しを始める、という一連の出来事を考えてみても、この中では、Takeshi が Zoyd の娘に恩返しをするという過程に、様々な出来事や人物が、関連している。

更にそこには、偶然的要素や、過去の因縁もからんでいる。Isaiah のバンドが招かれたのは、たまたま、the Cucumber Lounge のオーナー Ralph Wayvone, Jr. の妹の結婚式に来るはずだったバンドが都合が悪くなって来られなくなり、これまた、偶然に、今年の窓破りのために Ralph の店に来た Zoyd がその事情を聞かされて、更にまた偶然、その日の夕方に Zoyd の家に遊びに来ていた Isaiah がその話に飛びついた、という偶然の重なりがあったからである。

そして、この一連の出来事を支えている、別の要素、例えば、Zoyd が窓破りをする理由や、DL が Takeshi のパートナーをしている理由、DL が Ralph Wayvone, Sr. の家の結婚式に来ている理由、などは、後になって明かされる。71年頃に、Frenesi を夫と子供から引き離そうとした Brock は、Zoyd に、Frenesi に会わないことと、年に一度狂人じみたことをして、常に居場所をはっきりさせておくことを約束させ、そのため、現在に至るまで、Zoyd は窓破りをしているのである。DL は78年に、マフィアのドンである Ralph Sr. に、Brock の暗殺を依頼され、暗殺計画に気づいた Brock が身代わりに送った Takeshi に、間違っって恐ろしい技をかけてしまい、そ

の償いとして、現在パートナーを務めているのである。

これらの、過去の因縁、偶然的要素の絡み合った、出来事の連鎖が、「カルマ」であると言える。その流れは、金銭の流れと同様に、複雑なので、唯一、Takeshi のコンピューターのみが人の持っているカルマを計算でき、また、この複雑に入り組んだ関係、過去の因縁 (“the past . . . and the crimes behind the world, the thousand bloody arroyos in the hinterlands of time that stretched somberly inland from the honky-tonk coast of Now” [180]) を受けとめることの出来るのは、DL のような数少ない強靱な人だけであると感じられる。

しかし、大局的に見れば、そこで起きていることがらは、我々の日常的な、楽観的世界観とさほど異なっているわけではない。つまり、いいことをすれば、めぐりめぐって、その報いが訪れ、悪いことをすれば、やはり、その罰が当たるようになっていく、ということである。Vineland のエピグラフは、こうした信念を表明するものと考えることが出来る。

Every dog has his day,  
and a good dog  
just might have two days. (Epigraph of *Vineland*)

このように、善悪の行ないに必ずその報いをもたらすカルマの働きのために、小説中の随所で “faint signs of optimism”<sup>7)</sup> が感じられ、また、そのエンディングが、“Shakespearean comedy”<sup>8)</sup> のような印象を与えている。ただし、そう感じられる原因は、単に、Vineland の最後の部分で、Brock, Scantling とカケスに対する、三つの復讐が語られるということだけではない。

というのは、カルマは、単純で直線的な形で作用するのではなく、複雑で皮肉な形でその働きを明らかにするからである。例えば、本来 Brock 側の人間である Hector が、Frenesi の一家を Brock に捕まらないように Vineland Airport から救い出し(355)、Becker-Traverse 一族のキャンプに

無事送り届ける役割を果たすことになる。また、Brock が Prairie を誘拐しようとしているぎりぎりのタイミングで、レーガン大統領が、“REX 84”と呼ばれる演習を打ち切ってしまう、Brock の誘拐は未遂に終わることとなる (376)。結局、色々な因果関係、因縁のもつれがあった後、追い詰められていた反体制側の人々が、完全にはいえないが、多少救われる結果に終わる。

終わりの100ページほどの間に、“myriad different narrative shards”がびたりと組み合わさっていくように読者が感じる<sup>9)</sup> 要因は、それ以外にもある。そのように感じられるのは、その時点まで説明されていなかった謎の答えが与えられたり、細部の事情が、次々と明らかにされるからである。犬の Desmond が Prairie と Zoyd に飼われるようになった経緯 (319)、Zoyd が毎年窓破りをやっている本当の理由 (304)、Zoyd 親娘と Van Meter がこの Vineland の土地にやって来た経緯 (305-6)、“Thanatoid”達が Shade Creek に初めて現われたころの様子 (320)、最初33ページで言及される“Tubaldetox”という施設の詳しい説明 (335)、これら全てが次々と明らかになっている。ただし、Chipco の研究所が破壊される事件を始めとして、答えの与えられない謎もいくつか存在している。

そしてまた、Becker-Traverse 一族のキャンプは、敵味方入り乱れて、あらゆる人々を引きつけて、最後にそこに、Desmond が加わることによって、主要な顔ぶれが揃うのと同時に、小説は完結している、という構造になっている。

結局、カルマの働きは、反体制の人々に味方をし、一つの決着を見るのだが、常に反作用を伴うカルマの性質を鑑みると、再び、彼らに反動が襲いかかることも、おおいにありそうなことである。

### III

次に、複雑に働くカルマの作用と、語りの切り替えとの関連を見てみる。



一つの例として、第4章の最初の部分を取り上げてみたい。最初の3つのパラグラフで、Zoyd がダットサンの小型トラックに乗って Phantom Creek に住む RC と Moonpie の所に向かっている姿が描かれる (35-36)。第4パラグラフでは、Zoyd がこの夫婦と知り合ったのが、Frenesi との離婚が決定的になった晩であったことが回想され、第5パラグラフでは、Zoyd がその Frenesi にレコードアルバムを捧げるつもりであることが書かれている (36)。その後の3つのパラグラフでは、Zoyd が Frenesi と出会った頃に話は遡り (37-38)、次の5つのパラグラフで、Zoyd と Frenesi の結婚の様子を描かれる (38-39)。次いで、Zoyd が、最近、夜の間には魂だけが肉体から飛び出して “an extraordinary system of transport” によって、Frenesi に会いに行くことが出来ることが読者に知らされ、その体験を、ちょうど、Zoyd が RC の所へ出掛ける前に、Prairie に語っている場面、すなわち84年現在、に話が戻る (39-40)。更に、Prairie の “Say hi to 'em up on Phantom Creek, OK?” という、Zoyd を送り出す言葉と共に、Zoyd が RC の家に向かっているところにすっかり話が戻る (40)。

ここでの語りは、時間の中を行き来しながら、出来事の間にある因果関係を、現在との関連の中で、ことこまかに追っている。これも、原因と結果が鎖のようにつながっているカルマ的運命観を感じさせるものである。それゆえに、ある出来事の原因を求めて、単純過去で示された時点以前に遡ることが必要になるため、上で触れた、各パラグラフの最初の一文は、相と時制において、しばしば、過去完了の動詞を含んでいる。例えば、“Zoyd had known . . .” (36), “Frenesi had ridden . . .” (37), “Zoyd had grown up . . .” (37), “Mean or not, he hadn't cried . . .” (39) といった具合である。

ところが、カルマ的連鎖が働いているのは、パラグラフとパラグラフの間のみということではない。そこで、再び、第4章の、冒頭のセンテンスを見よう。

Zoyd hit the Phantom Ridge Road about an hour later than he

wanted because of Elvissa up the hill's blown head gasket, which brought her down at 6:00 A.M. to borrow his rig, for which it had taken Zoyd then a while to scout up a replacement. (35)

この一文のなかに、Zoyd が予定より遅れていた事実から始まって、Elvissa に貸した車の替わりを捜すのに手間取ったという、遅れていた理由と、更に、その Elvissa が車を借りに来なければならなかった事情、すなわち、Zoyd が遅れていた理由の原因、までが、盛り込まれている。

このようなことこまかな事情説明は、この場面だけの文脈、一つの文の内部だけ、でその役割を終わるのならば、さほど、注目に値しないかも知れないが、これらの、一見些細ないきさつが、数十ページ、場合によっては数百ページ後になって、重要な鍵を握っていたことが明らかになることが、間々、見られる。語り手は、意外な結果が生じることを、最初の段階で暗示することはない。読者は、作中人物同様に、何かの結果が生じて初めて、その原因となる、小さな出来事を思い起こさせられる。第4章の例に話を戻すと、Zoyd が Elvissa に貸した車は、その日のうちに、Brock 率いる警察の部隊によって取り押さえられることとなる (47)。

このような語りは、カルマの巧妙な働きを模しているのではないだろうか。最初、些細に見えることがらが、後々、決定的に運命を決めることになるのを、読者にも実感させる語りであると言ってもよさそうに思われる。もしも、Elvissa の車が故障せず、Zoyd の車を借りに来ていなければ、自分の車にのっていた Zoyd は、Brock に捕まってしまっていただろう。

DL が過去のカルマを “the thousand bloody arroyos in the hinterlands of time” (180) と表現していることも、興味深い。なぜ、“the thousand bloody rivers” ではなく “arroyos” なのだろうか。両者の間にある重要な差異は、“arroyo” は、通常水が無く乾いていて、大雨が降った時にのみ水が流れる種類の川である点である。DL がカルマの流れを “arroyo” に例える理由は、雨が降ったときに普段は川のないところに川が出来て、上流の

ある場所から下流のある場所へ水が流れるという“arroyo”の特徴と、何かの事件があったときに忘れていた過去の事件の影響が、時間の流れを下って、現在に影響を及ぼすというカルマの流れが、良く似ているからである。

#### IV

暫くの間、目に見えなくなっていて、忘れかけていたものの影響が、突然現われる。語りの内容がそのようなカルマの流れを模している例は既に見たが、次には、語りのスタイル、語法が、そのようなカルマの流れを模している例を見てみることにする。

He didn't get to the Cuke quite in time to miss Ralph Wayvone, Jr., in a glossy green suit accented with sequins, who was cracking jokes into the mike to *warm* this crowd, who in Ralph's opinion needed it, *up*. (356, my italics)

このセンテンスにおいて、語り手は、ぎこちなさを避けようと思えば、“warm up this crowd, who . . .”とか“warm this crowd up, who . . .”などと表現することが可能であるのに、そうはしていない。

句動詞を用いるのに、動詞と副詞が大きく隔てられているというようなことは、ある種の作家においては珍しいことではないが、Pynchon の、とくに、この作品においては、やはりきわだっている語法である。もう一つの例を見てみよう。

Today, inspired by a wave of Bigfoot sightings down in the Mattle, Vato had nearly convinced the skeptical lookalikes [Rick and Chick] that the Escondido had been found abandoned in a clearing, its owners frightened off by Bigfoot, in whose territory the car had then sat, anybody's prize, making its retrieval by the boys, who'd just happened to be in that part of the brush, an adventure full of perilous grades, narrow escapes, and kick-ass

four-wheeling all the way, followed at each turn by the open-mouthed Rick and Chick, upon whom at last Blood, usually the closer in these proceedings, laid, “So Bigfoot bein’ force majeure, we got the legal salvage rights.” (44)

いわゆる分詞構文や非制限的關係詞節が、文の構造を複雑にしているが、それよりも、注目すべきは、談話のレベルの変化である。語り手は、Vato が Rick と Chick に作り話を聞かせている状況を語ることから始めて、that 以下では、間接話法の形で、その話の内容を要約している。ところが、そのまま、文の終わりまでが that 節に含まれていることを予期して読み進めるとき、すなわち、“followed at each turn by the terrifying Bigfoot” とつながっていくことを期待するとき、代わりに読者が目にするのは、“followed at each turn by the openmouthed Rick and Chick” というつながりである。この例においては、Vato が説明をしている状況を語るという談話レベルから、その説明される内容に談話レベルが代わり、また最後で、元の談話レベルに戻っている。この場合も、ぎこちなさ、一読したときの分かりにくさを避けようとするなら、二文に分けるなどの手段はいくつもあるはずである。

読者は上の二つの例のような文を読むと、統語法や談話構造における深層構造が、存在して、センテンスを支えていることを意識させられる。結果として、これらの文は、普段は潜在していて目につかないカルマの状態が、ある時顕在化するという、既に見てきた *Vineland* のモチーフを文体の上でも繰り返しているものと考えることが出来る。

## V

では、そのように念入りに作品中に折り込まれているカルマに注目したとき、Frenesi の裏切りについては、どのようなことが明らかになるのだろうか。Frenesi 自身の言葉によれば、FBI のスパイとしての生活は “time-free

zone”の中にいるようなものであり、それに対して、普通の生活は、“the clockwork of cause and effect”であるという(90)。更に、スパイになった彼女は、自分が“safe in a world-next-to-the-world . . . where she could kick back and watch the unfolding drama”(237)だと感じている。すなわち、カルマに支配される日常生活とは異なって、スパイ生活は、カルマ的応報から自由であることが、何度も繰り返し述べられているのである。Frenesi は幼いころから、自分のしたことの始末を付けるのを避ける傾向があったという Sasha の証言(58)もあわせて考えると、Frenesi が大義を裏切ったのは、自由を追い求めるあまりに、自分の過去の行動の責任さえ逃れることを望んだことが原因であると考えられる。すなわち、彼女はカルマからの自由を求めて、仲間を裏切った、ということになるのではないだろうか。彼女の存在が、60年代の学生運動全体を象徴していると思なした場合でも、同じことが言えるだろう。

しかし、Frenesi は結局、FBI から切り捨てられ、カルマを逃れることは出来ない。このことは、Jess の朗読の内容を裏付け、誰もカルマの報いを逃れることが出来ないことを示している。

*Vineland* は、Prairie の母親捜しの物語であるのと同時に、“[the quest] for justice in a Nixonian and Reaganite America”<sup>10)</sup>でもある。その正義の裁きをもたらすものとして、「カルマ」という概念が作品中で重要な役割を果たしている。カルマは、目に見えないときでも、常に作用していて、その流れは複雑であるけれども、結局、苦しんでいる人々、復讐を遂げられないでいる人々、抑圧・排除された人々に味方するものである。

無論、カルマ概念を滑稽に歪曲している例も多く含まれている。既に取り上げた例以外にも、Sister Rochelle が、the Sisterhood of the Kunoichi Attentives での食事がまずいことを言い訳するために、“The karmic invariance is, is we’re paying for high discipline in the Sisterhood with a zoo in the kitchen”(109)と言っているのも一例である。つまり、いいものには悪いものが伴うもの、訓練法が優れている分、料理がまずいのは、

カルマの一定性という法則で仕方がないというのがその言い訳である。

しかし、カルマがただのパロディだと考えてしまえば、この小説の構造や、主題を捕えることは出来ない。数々のポップカルチャーへのアリュージョンからは、60年代から70年代初頭にかけての若者達、学生達の運動と、その挫折を、その時代を知らない世代、Isaiah や Prairie 達の属する世代に伝えようとする姿勢が感じられる。その姿勢の背後には、体制に対する恨みを語り継ぐことによって、カルマ的復讐がいつか訪れることを、信じているというよりは、夢見ている、作者の姿が垣間見られるようである。レーガン大統領が再選される84年という年を時代設定として選んでいるのは、「カルマ」的正義の裁きが訪れない現実の悲しさ、皮肉な姿を、鮮明にするためなのかも知れない。

(この小論は94年7月に開かれた日本アメリカ文学会関西支部例会での口頭発表に大幅に加筆したものである。)

#### 註

- 1) Thomas Pynchon, *Vineland* (New York: Viking Penguin, 1990). 以後この作品からの引用は全てこの版により、ページ数は括弧に入れて本文中に示す。
- 2) Elaine B. Safer, "Pynchon's World and Its Legendary Past: Humor and the Absurd in a Twentieth-Century Vineland," *Critique* 32.2 (1990): 118.
- 3) N. Katherine Hayles, "'Who Was Saved?': Families, Snitches, and Recuperation in Pynchon's *Vineland*," *Critique* 32.2 (1990): 78. および、Salman Rushdie, "Still Crazy After All These Years," rev. of *Vineland*, *The New York Times Book Review* 14 Jan. 1990: 37.
- 4) "karma," *The Oxford English Dictionary*, 2nd ed. (Oxford: Clarendon Press, 1989).
- 5) W. Y. Evans-Wentz, comp. and ed., *The Tibetan Book of the*

*Dead or the After-Death Experiences on the Bardo Plane, according to Lama Kazi Dawa-Samdup's English Rendering*, 3rd ed. (Oxford: Oxford UP, 1960), 43.

- 6) Evans-Wentz, 37.
- 7) Christopher Lehman-Haupt, "Vineland, Pynchon's First Novel in 17 Years," rev. of *Vineland*, *The New York Times* 26 Dec. 1989: C21.
- 8) Edward Mendelson, "Levity's Rainbow," rev. of *Vineland*, *The New Republic* 203.2-3 (1990): 46.
- 9) Salman Rushdie, 36.
- 0) David Cowart, "Continuity and Growth," rev. of *Vineland*, *Kenyon Review* 12 (1990): 179.